

病気予兆の指標構築へ

弘大、山形のベンチャーと連携

弘前大学と山形県鶴岡市のライフサイエンスベンチャー企業「ヒューマン・メタボローム・テクノロジー」は5月1日付で、共同

研究講座「メタボロミクスイノベーション学講座」を開設した。弘前大が持っている岩木健康増進プロジェクトのビッグデータと同社の代謝解析に関する情報を合わせることで、疾患発症の可能性をかなり早い段階から知ることができるとの構築を目指す。7日、弘大医学部で開設式を行った。同大の共同研究は14例目。

講座設置期間は3年間で、メンバーは中路重之特任教授、同社の研究員ら6人。同社は、細胞内にあるアミノ酸などの代謝物質(メタボローム)を短時間で一齐に測定する分析技術(CEIMS)を持っている。共同講座では、CEIMSを活用して、健康な人とそうでない人の代謝物質の状態を比較。心と体の健康増進に関するバイオマーカー

(生体の指標)や、疾患を早期に予知できる基準を確立する。

開設式で、同社の菅野隆二代表取締役社長が「弘前大のビッグデータは世界に誇れるデータ。これとメタボローム解析情報を合わせることで、ヘルスケアに大きな貢献ができるのではないか」、橋爪克仁取締役は「5年以内には指標を実用化したい」と語った。



病気の早期予知に関する指標作成に意欲を示す(左から)若林医学研究科長、佐藤学長、菅野社長、橋爪取締役。7日、弘前大医学部

中路特任教授は、独自の技術を持つ同社との共同研究によって、健康プロジェクト「COI」が一層発展することに期待感を示した。(菊谷賢)